

日本語動詞接尾語「つく」の意味・用法について

李 静 玫

一 はじめに

日本語において動詞接尾語「つく」は主に擬声語・擬態語の語基と結合して動詞を作る働きをしている。つまり、擬声語・擬態語を動詞化するのが「つく」の主な役割である。これは、「めく」「だつ」のように様々な種類の品詞と結合して動詞を派生する他の動詞接尾語とは区別される「つく」の特徴である。このような点に注目して本稿では、『日本国語大辞典』から収集した「つく」が派生する派生動詞を対象とし、結合する語基と意味別に分類を行い、分析を加えることにする。この分析を通じて、動詞接尾語「つく」の意味・用法および語構成上の特徴をさらに明らかにしたいと思う。

二 辞書における意味記述

『日本国語大辞典第二版』

つ・く〔接尾〕

〔四段型活用〕擬声語・擬態語などについてこれを動詞化し、そういう動作をする状態、そのような様子を示す状態になつてくる意を表わす。「がたつく」「ぶらつく」「ふらつく」など。

『大辞林』第三版 三省堂 二〇〇六

つ・く〔接尾〕〔動詞五〔四〕段型活用。動詞「付く」から〕擬声語・擬態語に付いて、そういう様子になるという意を表す。がたつく、ごたつく、べたつく

『大辞泉』小学館一九九八

つ・く〔接尾〕《動詞五〔四〕段型活用。動詞「付く」から》擬声語・擬態語などに付いて、そのようなようすを示す状態である意を表す。「がたーく」「ぶらーく」

『新明解国語辞典』三省堂二〇二二

つ・く（造語・五型）

〔擬声語・擬態語に付いて〕その物音・動作・様子が認められる。「がたー／べたー／ぶらー」

『**明鏡国語辞典**』第二版 大修館書店 二〇一〇年二月

つ・く【付く】 『接尾』《擬声語・擬態語に付いて五段活用

用の動詞を作る》
そのようなようすを示す状態である。「がたー・ばらー・
ちらー・むかー・まじー」

『**ベネツセ表現読解国語辞典**』ベネツセ 二〇〇三年五月

未記載

『**岩波国語辞典**』第七版 岩波書店 二〇一一年一月

未記載

『**現代国語例解辞典**』第五版 小学館 二〇一六年一月

【つ・く】 『接尾』(五段型活用) 擬声語、擬態語などに付いてこれを動詞化し、そういう動作をする状態、そのような様子を示す状態になってくる意を表す。「がたつく」「ぐらつく」「ふらつく」など。

『**集英社国語辞典**』第三版 集英社 二〇二二年二月

つ・く【付く・附く】

⑬『**補助**』(擬態語・擬音語に付いて、動作・状態・音などが) そうなってくる。「ふらー」「べとー」「がたー」

『**新潮現代国語辞典**』第二版 新潮社 二〇〇〇年二月

未記載

以上辞書における意味記述をまとめてみると、「つく」は、擬声語・擬態語などに付いて動詞を作る接尾語であり、「そういう様子や状態になる、そうなってくる」という意味を表していることがわかる。

また、調査の対象とした上記の現代日本語辞書の中で「つく」を接尾語として認定しているのは『**日本国語大辞典**』をはじめとした六冊で、『**集英社国語辞典**』では「つく」を動詞の項目に入れて補助動詞として扱っている。残りの三冊の辞書では動詞「つく」以外、接尾語としての「つく」に対する意味記述は見当たらなかった。

このように各辞書では接尾語の認定において違いが生じているのがわかる。これは動詞接尾語「つく」が動詞「つく」から接尾語に定着した、いわば動詞由来接尾語であるため、本動詞の意味がまだ残っているからである。

また、古語辞書における意味記述を以下の辞書

『**全文全訳古語辞典**』『**岩波古語辞典**』『**三省堂全訳読解古語辞典**』『**古語林**』『**新全訳古語辞典**』『**角川最新古語辞典**』『**古語大辞典**』『**新明解古語辞典**』『**旺文社古語辞典**』『**時代別国語大辞典**』**室町時代編四**

から調べた結果、動詞接尾語としての「つく」に対する意味記述は一つも見当たらなかった。ということは、動詞接尾語「つく」は「めく」などの他の動詞接尾語に比べ、わりと新しく用いられた語であると推測できる。

以上辞書における意味記述を参考にしながら、次では、『日本国語大辞典』から収集した動詞接尾語「つく」が派生する派生動詞を対象とし、結合する語基の品詞別に分類し、それぞれの意味について分析を加えることにする。また、もう一つの課題として類義関係にある「めく」と比較を行うことにする。これを通じて動詞接尾語「つく」の意味・用法および語構成上の特徴をさらに明らかにしたいと思う。

三 動詞接尾語「つく」の意味・用法

三・一 「つく」の種類

動詞接尾語は、結合する語基の品詞によっていくつかの種類に分類することができる。このような特徴に注目して、ここでは『日本国語大辞典』から収集した二・四語の動詞接尾語「つく」からなる派生動詞を対象とし、結合する語基を中心に分類を試みることにする。

まず、李(二〇一八)でも触れたように以下の先行研究を参考にしながら

(一) 阪倉(一九六六)

接尾語と接する語基の種類

一 名詞

二 「さや」「しづ」のごとき、いわゆる語根。「たを」「きら」のごとき象徴辞(擬声語・擬態語)をふくむ。

三 「すすろ」「あきら」「たひら」「たしか」のごとき、形

容動詞語幹乃至は副詞の類。みぎの(二)に比して、そのあらわす概念はさらに明確で、独立性がよい。

四 形容詞。語基としてあらわれるのは、「いた」「ひろ」のごとき語幹部分であり、したがって、みぎの(二)と本質的には同性格のものであろうが、形容詞語幹になり得る点で、それらとは概念内容に差があるうと考えて、別にたてる。

五 動詞

(二) 関(一九七九)

① 名詞語基

② 形容詞語幹語基

③ 形容動詞語幹語基

④ 副詞語基

⑤ 動詞連用形語基

(三) 山口(一九九三)

① 名詞を語基とするもの

② 語根(擬声語・擬態語を含む)を語基とするもの

③ 形容動詞語幹乃至は副詞を語基とするもの

④ 形容詞を語基とするもの

⑤ 動詞を語基とするもの

次のように動詞接尾語を結合する語基によって六つの項目に分類を試みた。

「結合する語基による分類」

- (一) 名詞を語基とするもの
- (二) 形容詞を語基とするもの
- (三) 形容動詞を語基とするもの
- (四) 副詞を語基とするもの
- (五) 動詞を語基とするもの
- (六) 語素

上記の項目に基づいて『日本国語大辞典』から収集した二一四語を分類してまとめた結果が表一である。ちなみに、辞書ではまだ「つく」が接尾語として認定されていない語例も見つかり、次の九語の派生動詞も対象に含めて分類を行った。

うぼつく　がりつく　どしつく　ぱらつく　あだつく
うとつく　おじつく　ねばつく　のろつく

表一 語基による「つく」の語数
(*副詞が擬声語と擬態語の両方の意味を同時に持つ場合)

語基		語数
(一) 名詞		2
(二) 形容詞語幹		0
(三) 形容動詞語幹		4
(四) 副詞	副詞	0
	擬声語	30
	擬態語	167
	擬声・擬態*	12
(五) 動詞の連用形		1
(六) 語素		0

表一を見ると、「つく」と結合する語基は他の品詞に比べ、副詞が圧倒的に多く、その語数は全体の九割以上を占めていることがわかる。副詞の中でも、擬声語と結合する語例は三〇語、擬態語と結合する語例は一六七で、擬声語よりも擬態語の方がはるかに多く用いられているのである。また、一つの副詞が擬声語と擬態語の両方の意味を同時に持っている語例も一二語が見つかった。以上のことから動詞接尾語「つく」の主な働きは擬声語・擬態語を動詞化するのであることが証明できる。

また、次の表二を見ると、

表二 「つく」の初出

(『日本国語大辞典』より 初出が未詳であるのは除く)

初出		語数
上代	奈良時代	0
中古	平安時代	1
中世	鎌倉時代	2
	室町時代	6
近世	江戸時代	148
近代	明治時代	29
	大正	7
現代	昭和	11

「つく」は上代から中世まではその語数が極めて少なく、近世に入ってから爆発的な増加を見せていることがわかる。中世まではわずかに九語の語例しか見当たらなかったのが、近世になると一気に増え、江戸時代だけでも一四八語も用いられ始めるのである。以降、近代期になって語数は激減しているものの、四六語の語例が新しく用いられる。これは、「つく」が動詞接尾語の中でもわりと新しい語であるものの、造語力は高いことを意味する。以上のことを踏まえ、次では動詞接尾語「つく」の意味・用法について詳しく分析を行うことにする。

三・二「つく」の意味・用法

表一でも触れたように動詞接尾語「つく」は語例の九割以上が副詞と結合するという偏りを見せている。しかし、数は少ないものの、名詞、形容動詞、動詞とも結合する語例が見つかつたため、ここでは「つく」と結合する語基を一つずつ取り上げ、その意味・用法について分析を加えてみることにする。

(一) 名詞を語基とするもの

名詞と結合する「つく」の語例は全部で二語見つかつり、語例は以下の通りである。ちなみに、○は『日本国語大辞典』から調べた初出年度である。

けばつく(一九三三～三七) .. けばだつようである。そそける。
むらつく(一六九六) .. あちこちにむらがる。

『日本国語大辞典』より

「けばつく」と「むらつく」は両方とも近世から用いられはじめた語である。ここで、「けばつく」は「けばだつ」と、「むらつ

く」は「むらがる」と交替できる。

また、「けば」「むら」という名詞と結合する場合、「つく」は単に「〳〵の状態になる」という意味ではなく、名詞の状態や様子をもつと強くなるという強調の意味を表しているのである。これが、「副詞+つく」との最も違う点である。

(二) 副詞を語基とするもの

『日本国語大辞典』から収集した二一四語の中で副詞と結合する「つく」の語例は擬態語が三〇語、擬態語が一六七語で語例の殆どを占めている。つまり、「つく」は主に擬声語と擬態語を動詞化する文法的機能を担っているといえる。それでは、「つく」と結合する副詞を擬声語と擬態語に分けてそれぞれの意味・用法について分析を行うことにする。

まず、擬声語を語基とする「つく」の語例は以下の通りである。

じゃりつく .. 砂や小石でじゃりじゃりする。

かたつく .. かたかたと音がする。

がらつく .. がらがらと音がする。

ぎしつく .. ぎしぎしする。

ぐびつく .. 飲みたい、食べたいという欲望のためにのどが鳴る。ぐびぐびする。

げらつく .. げらげらと大声で笑う。

こそつく .. こそこそと音をさせる。また、そのような音をた

てて動く。

ことつく .. ことと音がする。

めきつく .. めきめきいう。きしんで音を出す。

けらつく・けらけら笑う。ぶざける。

(がりつく くびつく ごそつく ごとつく ごろつく ざわつく じゃきつく ぜりつく ちゃぶつく ちゃらつく どかつく どしつく どたつく どぶつく はたつく ばさつく ばたつく ぱりつく ぶつつく がやつく めりつく)

「つく」に上接する擬声語が、「げらつく ごそつく けらつく めきつく」などのように人の笑い声や人が意図的に出す音の場合、「つく」は「〜という音をたてる」という他動詞的な働きをする。一方、「じやりつく かたつく がらつく」のように結合する擬声語が自然や物からする音の場合は「〜の音がする」という自動詞的な働きをするのである。このように擬声語と結合する「つく」は意味の添加よりは文法的機能にその重点が置かれているといえる。

表三 「擬声語+つく」の初出

(初出が未詳であるのは除く)

初出		語数
上代	奈良時代	0
中古	平安時代	0
中世	鎌倉時代	0
	室町時代	0
近世	江戸時代	22
近代	明治時代	2
	大正	1
現代	昭和	1

また、表三を見ると、擬声語と結合する「つく」の語例は中世までは一例も見当たらないことがわかる。語例のすべてが近世以降から用いられたはじめたのである。

表四 「つく」と結合する擬声語の初出

(『日本国語大辞典』より)

初出		語数
上代	奈良時代	0
中古	平安時代	2
中世	鎌倉時代	1
	室町時代	5
近世	江戸時代	18
近代	明治時代	2
	大正	0
現代	昭和	1

また、表四をみると、「つく」と結合する擬声語も六割以上が近世以降から見られはじめ、中でも江戸期にもっともその数が増加していることがわかる。これもまた同じ時期に「つく」の造語力を高めた大きな理由であると推測できる。

次は、擬態語を語基とする「つく」について分析をしてみる。擬態語と結合する「つく」の語例は一六七語でその数はもつとも多い。

表五 「擬態語+つく」の初出

初出		語数
上代	奈良時代	0
中古	平安時代	1
中世	鎌倉時代	2
	室町時代	5
近世	江戸時代	115
近代	明治時代	27
	大正	3
現代	昭和	8

また、表五を見ると、擬態語を語基とする「つく」の語例も擬声語の場合と同じく近世期に入ってから多く用いられはじめたのがわかる。中世期までわずか八語しか見られなかったのが、江戸時代になって一気に急増したのである。

表六 「つく」と結合する擬態語の初出

(『日本国語大辞典』より)

初出		語数
上代	奈良時代	0
中古	平安時代	6
中世	鎌倉時代	16
	室町時代	17
近世	江戸時代	101
近代	明治時代	16
	大正	2
現代	昭和	4

さらに、表六のように「つく」に上接する擬態語の初出時期を調べた結果、その語数はまったく違うが、江戸時代に入って急増するという点は同じであった。以上のことから、近世期に入って擬態語といった副詞が発達し、これによって文法的機能を担う「つく」からなる派生動詞が急増したことが推測できる。

また、擬態語は「いらいら」のように状態を表すものと「ひらひら」のように動作を表すものに分けられるため、擬態語を語基とする「つく」からなる派生動詞も次のように分類することができる。

状態を表す擬態語

いらつく… (思うようにいかなかったり不快なことがあったりして) 気持がたかぶる。いらいらする。

ぬらつく…ぬらぬらとする。ぬめぬめとする。

むしつく…蒸し暑く感じる。むしむしする。

からつく…からからに乾く。干からびる。

きらつく…きらきら光る。きらめく。

ねばつく…ねばねばする。べたつく。

動作を表す擬態語

ゆらつく… ゆらゆらとゆれる。ゆれうごく。ふらつく。

うごつく…少しずつ動く。動揺する。うごめく。

かさつく…忙しそうに働く。忙しい思いをする。

ふらつく…ふらふらゆれ動く。また、足もとが不安定で、ふら

ふらする。

どぶつく…水などがたまってゆれ動く。

ひくつく…わずかにふるえ動く。ひくひくする。

ひらつく…布や紙など薄く軽いものが垂れ下がって風などに揺れ動く。ひらひらする。

びくつく…こまかく振れ動く。びくめく。また、こわがり恐れてふるえる。びくびくする。

このように擬態語を語基とする「つく」は、「〳〵の状態になる」の意味として用いられ、ほとんど「する」に言い換えることができる。

(三) 動詞を語基とするもの

動詞と語基とする語例は「じれつく」が唯一である。『日本国語大辞典』の意味記述をみると、「じれつく」の「つく」を接尾語として認定している。

じれつく(一七八〇)…いらいらして腹を立てる。

普通、動詞と結合する場合、「つく」は接尾語ではなく、補助動詞として用いられる。

しがみつく…しっかりと取りつく。力をこめてすがりつく。

しゃぶりつく…離れないようにしっかりとしがみつく。むしゃぶりつく。さぶりつく。

この場合の「つく」は本来動詞の意味がちゃんと残っていてどこかへ密着するという意味を表している。一方、「じれつく」の場合、「つく」は動詞としての意味はもう無くなり、じれている状態になってくるという意を表している。つまり、「じれる」という動詞はいらいらする気持ちを表す状態動詞であるため、接尾語「つく」と結合することができたと思われる。ちなみに、「じれつく」は「いらだつ」と言い換えられる。

三三 「つく」と「めく」

動詞接尾語の中でその働きから見てもっとも「つく」に近いのが「めく」である。このため、次のように「つく」と「めく」は交替することができる。

「つく」と「めく」の交替

うごつくーうごめく　うじつくーうじめく　がぶつくーがぶめく
きらつくーきらめく　ちらつくーちらめく　のらつくーのらめく
はたつくーはためく　びくつくーびくめく　よろつくーよろめく
とろつくーとろめく　ぶらつくーぶらめく　ざわつくーざわめく
それでは、「つく」と「めく」はいつから用いられ始めたのであるうか。

「つく」は表一でも触れたように初出時期が近世以降である語例が全体の九割を超えている。

表七「めく」の初出

(李(二〇一八)より)

初出		語数
上代	奈良時代	3
中古	平安時代	75
中世	鎌倉時代	36
	室町時代	51
近世	江戸時代	94
近代	明治時代	13
	大正	3
現代	昭和	5

一方、表七を見ると、「めく」はその初出時期が古く、中古から近世にかけてすぐれた造語力を発揮していることがわかる。また、名詞から副詞、動詞などの様々な品詞と結合するのが特徴である。

表八 「副詞+めく」の初出時期

初出		語数		
		副詞	擬声語	擬態語
上代	奈良時代	0	1	1
中古	平安時代	3	22	12
中世	鎌倉時代	0	10	17
	室町時代	1	11	29
近世	江戸時代	3	21	29
近代	明治時代	0	0	3
	大正	0	0	0
現代	昭和	0	0	1

また、擬声語と擬態語においても表八をみると「めく」は中古から近世に渡ってよく用いられていたことが分かる。これが「つく」との最も異なる点であるといえる。

以上のことから「つく」は擬声語と擬態語を動詞化するだけに特殊化されている接尾語であると断言できる。

四 今後の課題

本稿では、調査の対象を『日本国語大辞典』をはじめとした辞書だけに限定してしまったが、今後は古典文学などの資料を用いて実例を見ながらの分析を行う必要があると思われる。また、「めく」と「つく」が交替する語例についてもっと丁寧に分析をする必要があると思われる。

《参考文献》

- 阪倉篤義「語構成の研究」(角川書店、一九六六)
 関一雄「接尾語「ぶ」・「む」・「めく」・「だつ」・「がる」の消長(一)」
 『山口大学文学会誌三〇』一九七九
 山口豊「接尾語「めく」の消長」『言語表現研究9』兵庫教育大学
 一九九三
 川瀬卓「象徴詞を動詞化する形式変遷」『語文研究九九』九州大学
 国文学会
 二〇〇五
 楊淑雲「擬態語の派生動詞について」『国語学研究三三』一九九三
 李静政「日本語動詞接尾語「めく」の意味・用法について」『日本文学』立教大学日本文学会 二〇一八

- 『大辞林』第三版 三省堂 二〇〇六
 - 『岩波国語辞典』第七版 岩波書店 二〇一一
 - 『大辞泉』小学館一九九八
 - 『新明解国語辞典』三省堂二〇一二
 - 『明鏡国語辞典』第二版 大修館書店 二〇一〇年十二月
 - 『ベネッセ表現読解国語辞典』ベネッセ 二〇〇三年五月
 - 『現代国語例解辞典』第五版 小学館 二〇一六年一月
 - 『集英社国語辞典』第三版 集英社 二〇一二年十二月
 - 『新潮現代国語辞典』第二版 新潮社 二〇〇〇年二月
- (い) じょんみん 本学日本学研究所研究員